
ムスカ大佐達がガリア義勇軍で活躍するそうです

よしむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムスカ大佐達がガリア義勇軍で活躍するそうです

【Nコード】

N9359P

【作者名】

よしむ

【あらすじ】

天空の城を支配し、神に等しい力を手に入れようとした男は、罪を償う為神に違う世界に飛ばされる。

そこで彼が取る行動は・・・

プロローグ（前書き）

初投稿になります。ムスカ大佐を戦場のヴァルキュリアに参加させたかったんです。

キャラクターの喋り方や性格が変わっているかもしれませんが、それでも良い方は見てください。

今回はまだガリアには行ってません。

プロローグ

「終点が玉座の間とは上出来じゃないか、ここへ来い」
金髪の男は目の前の少女に銃を向けながら話しかける。

「これが玉座ですって？ここはお墓よ、あなたと私の」
少女は銃を向けられながらも臆することなく話しかけていた。

「国が滅びたのに、王が生きてるなんて滑稽だわ、あなたに石は渡さない。

あなたはここから出る事もできずに私と死ぬの。

今は、なぜラピユタが滅びたのか、私にはよくわかる。

ゴンドアの谷の歌にあるもの。

土に根を下ろし、風と共に生きよう。種と共に冬を越え、鳥と共に春を歌おう。

どんなに恐ろしい武器を持っても、沢山の可哀想なロボット達を操っても、土から離れては生きられないのよ」

ズキーン
今まで黙っていた男が少女の二つある髪の毛の内ひとつのおさげを正確に撃ち抜いた。

「ラピユタは滅びぬ、何度でも蘇るさ、ラピユタの科学力こそ人類の夢だからだ！」
ズキーン

もうひとつのおさげも男は正確に撃ち抜く。

「次は耳だ、ひざまずけ 跪け命乞いをしろ。小僧から石を取り戻せ」
男は声を荒げながら少女に言う。

「待てー！」

玉座の間の入り口から大砲を持った少年が来た。

「石は隠した、シートを撃ってみろ！石は戻らないぞ」

少年は大砲を金髪の男に向けながら叫ぶ。

「パズー、来ちゃダメ！この人はどうせ私たちを殺す気よ」

少女が少年に向かって言うが男が遮りさえぎり

「小僧、娘の命と引き換えだ、石のありかを言え！

それとも、その大砲で私と勝負するかね」

少年は男に大砲を向けているが男は余裕の表情で少年に問いかける。

「シートと二人っきりで話したい」

少年は男にそう言うが。

「来ちゃダメ！石を捨てて逃げて」

少女にはさっきまで男に見せていた強気な態度は無く、今にも泣きそうだった。

「三分間待つてやる」

金髪の男はそう言い、数歩後ろに下がる。

少年と少女は近くに寄ると抱き合った。

何かを話しているが距離があり聞こえない。

その間、男は拳銃の弾を3秒で装填した。

.....

「時間だ、答えを聞こう」

男は冷徹に時間切れを宣告した。

すると少年は大砲を捨て少女は手を組み。

「バルス」

と言い放った。

その時飛行石と呼ばれる石が強烈な閃光を放ち・・・

男は視力を一時的に失った。

ガラガラガラ・・・

建物が倒壊していく音が聞こえるが視力を失った男は玉座の間を彷徨っていた。

「ああ、目が、目がア！」

そう叫ぶが目は痛み続け、視力は戻らない。

「ああ・・・ああ・・・、目が・・・ああああ！」

男はついに床の裂け目から海へ落ちていく。

何の偶然か、モウロ將軍たちを落とした地点へ落ちて行つた。

男の意識はそこで無くなった。

圧倒的な力を手に入れようとした男は死に、少年らは元いた場所に戻っていく。

一つの世界で一つの物語が終わった。

しかし、神に等しき力を得ようとした男には試練が待ち受けていた。

プロローグ（後書き）

誤字脱字などあると思いますが、できる限りなおしていきたいです。

第一話 転生

「・・・ここは何処だ？」

ただ真っ白な空間が広がっている。

体は見え、感覚も無いのでただ漂うしかできなかった。

「起きたか」

高齡の人物が突然現れた。

「誰だ？」

ムス力は質問するが信じられない答えが返ってきた。

「僕は神じゃ」

この老人が？

「神？馬鹿馬鹿しい、おい、ここはどこだ？私は確かラピユタから落ちたはずだが。」

「そうじゃ、お主は死んだ」

「馬鹿な、それじゃあなぜ・・・」

ふとムス力はある答えが浮かんだ。
本当に神なのではないか、と。

「うむ、僕は神だ。」

どうやら納得するしかないようだ。

「・・・で、神が私に何の用です？」

「お主は人類には早過ぎた力を得ようとした、そのために数多くの罪を犯してきた。

しかし、できるかぎり紳士的に事を運ぼうとした。何よりお主は面白い」

私が面白いとは・・・

「よって本当なら地獄送りなのじゃがお主にはある国に行ってもらう」

「ある国とは？」

「ガリア公国じゃ」

ガリア公国？聞いたことがない。

「そこで私は何をすればいいのです？」

「うむ、ガリア公国の義勇軍に入隊して公国を勝利に導いてほしいんじゃ。地獄に行くよりはましじゃろ？」

「・・・わかりました、引き受けましょう」

「そうか、引き受けてくれるか、それじゃあさっそく」

「ま・・・待て、生き返ったら私は何をすればいい！」
あわてて言うがもう体が透明になっていく

「川に行け、とでも言っとくかのう」

そこでムスカは意識を失った・・・

ミサヲ

「へっ・・・しっは・・・？」

ムス力は路地裏に居た。

服装は変わらないどころか新品に見える。

表通りに出てみたが、場所を聞こうにも人が少ない。

私は大きな二つの風車が特徴の街にいる。

「とりあえず川を探すか・・・」

ちょうど歩いていた女の人がいたので話しかけた。

「すみません、ここは何という街ですか？」

すると女の人は

「ここはブルールの街だけど・・・あんた旅人かい？早く逃げたほうがいいわよ」

「逃げる？どうしてですか？」

「ここにもうすぐ帝国軍が来るんだよ、悪いことは言わないからさっさと逃げな、あたしゃ行くよ」

そう言って立ち去ろうとするが、肝心なことを聞いていないので。

「待ってくれ、この街に川はあるか？」

「ああ、あるさ、その路地をまっすぐ行けば川がある」
女の人は走っていった。

ムス力は言われたとおりに川に向かった。

川には銃で武装した女性とその部下らしき人物二人に腕を掴まれていると手帳を持った青年が居た。

すると反対から少女がやってきて、青年を拘束している集団に近寄って行った。

しばらくすると青年は釈放されたが、かわりにこちらに寄ってきた。

「見かけない顔ね・・・あなたは何をしているんですか？」
明らかに私を怪しんでいる。

「私はムスカ、この街には旅行で来た。」

「怪しいわね、私たちと詰・・・」
バン バン

女性の言葉は銃声に遮られた

「敵襲!？」

どうやら帝国軍とやらがやってきたらしい。

赤い甲冑をきた趣味の悪い奴らだ。

しばらく応戦していたが、こちらの銃を持っていた3人のうち一人が撃たれた。

すると女性は倒れた仲間の銃を取り。

「ウェルキン、銃は撃てるよね？」

と青年に問いかけた。

「ああ、軍事教練で習ってきたからね」
青年が答える。

「敵はおそらく偵察目的の少人数部隊よ、私たちで撃退しましょう」
「わかった」

銃を渡された青年は敵を排除していく。

女性もなかなかの腕のようだ。

「ん？」

草むらから二人の帝国兵が寄ってきた。

隠れているつもりだろうが、特務機関時代の経験で、察知するのはたやすいことだった。

だが銃をもっている三人は気付いておらず、敵兵はどんどん寄ってきた。

ここで敵を殺せば信用が得られそうだな。

ムスカは懷に手を伸ばして、愛用のエンフィールド・リボルバーを手取る。

愛銃はいつも通りの所にあった。

バキュン バキュン

草むらに二発撃つ。

ちょうど偵察部隊をせん滅した女性が
草むらに銃を撃ったムスカを警戒して、こちらに銃を向けた。

「あなたは何をしているの！」

「いや失礼、帝国兵が草むらに居るようなのでね。」
女性が確認しにいくと、確かに帝国兵がいた、どれも頭を撃ち抜かれていて即死だった。

「本当ね、助けてくれてありがとう、私はアリシア」

「僕はウェルキンです」

「無事で何よりですよ、ところでアリシアさん、私は義勇軍に入隊したいのですが、君たちは義勇軍かね？」
女性が答える

「いえ、私たちはブルールの自警団です」

「そうですか私も避難します」
そいうとムスカはその場から風のように去って行った。

第一話 転生（後書き）

かなりご都合主義でめっちゃくちゃですが、大目に見てくれるとうれしいです。

第二話 提案

アリシアら自警団と別れたムスカは情報収集を行うことにした。

数時間後、避難所で集めた情報によると。

ガリア公国は武装中立を国是とした立憲君主制の国家であり、ヴァルキュリア人という、民族の子孫が代々統治してきた国らしい。

人口は約400万人、首都はランドグリーズ。

このガリア公国という小国が滅亡を逃れ、繁栄した理由は、ラグナイトと呼ばれるなんとも不思議な鉱物が原因らしい。

このラグナイトは車の燃料や機械の動力に使ったり、武器の弾薬に使ったり 怪我の治療をしたり 建物の建築にも使用されるらしい。

ガリア公国はかなりのラグナイトを保有しているらしい。

このような鉱物があるから大国に狙われる原因にもなるのだが・・・

次は東ヨーロッパ帝国連合
通称帝国

皇帝が全権を持つ連合国家で、大西洋連邦機構と現在戦争中だ。

連邦と戦力は拮抗している。

ガリア公国にも戦争を仕掛けるあたり、軍事力はかなりあるだろう。ダルクス人という人種を迫害しており、収容所で強制労働させているらしい、詳細は不明だ。

次は大西洋連邦機構
通称連邦

王政が廃止され、共和制になった国の連合体。

選挙で選ばれた連邦議長による議会が作られているらしいが、民族が多いため意見が合わず。

協調性は無いが、帝国と同じ位の大国。

このような大国に囲まれたガリア公国がどうして残っているかという、

この国は武装中立を掲げ、国民皆兵制度を取っており、国民は軍事教練を受けている。

よって有事の際は義勇軍を編成して対応するという（内戦には対応しないらしい）

長年維持してきた体制だが、近年弱体化してると言われる。

この世界では飛行機などはまだ無く、空襲の心配はないようだ。

さて、避難所にトラックがきたようなので、私も便乗させてもらっ

だが、そう簡単には行かなかった。

帝国軍の大軍が攻めてきたのだ。

避難所は騒然となった。

「おい、帝国が攻めてきたぞ、早くトラックを出してくれよ。」

「ガリア正規軍はどうしたんだ、とつくに救援の要請はだしたぞ！」
市民たちが慌てふためく

しばらく砲撃音が聞こた。

風車塔が砲撃を受け倒壊していく。

「ああ・・・親子風車が・・・」

「くそっ！帝国め」

しばらくすると誰かが壇を用意し、壇上に人があがった。
アリシアである

「みなさん、落ち着いてください。いま、ブルールの自警団が全力で帝国軍を食い止めています」

みなさんは自警団の誘導に従って街からでてください」

壇上が上がって話していたのはアリシアだった。

アリシアはムスカの事を見ると、ムスカを避難所から引っ張って行った。

「ちょっとついてきてもらいたいの」

この調子じゃ付いて行ったほうがよさそうだ。

避難所から少し離れたところに連れてこられたムスカ。
そこにはウエルキンと黒髪の少女が居た。

「また会いましたねウエルキンさんとあなたは・・・？」

「イサラです」

「イサラさんですか、私はムスカです」
いつもの紳士スタイルで挨拶を終える。

「それじゃ、私は自警団の仕事があるので・・・」
アリシアは戻って行った。

するとウエルキンがムスカに申し訳なさそうに言った。

「あの時はどうもムスカさん、本当はいけないんだけど手伝ってもらいたいことがあって」

「どうしたんです？」

「いま帝国が侵入している地域に僕の家があるんだけど、取りに行きたいものがあるんだ、父親の形見なんです」

「危険を冒してまで取りに行くものなんですか？」

「実は・・・」

ムスカに小声で答えた。

「ほう・・・そのようなものが、確かに帝国に奪われたら厄介でしょう」

「お願いしますムスカさん、僕だけでは僕の妹のイサラを連れてたどり着けない・・・」

しばらく考えたムスカだったが、ふとひらめいた。

「わかりました、しかし条件があります」

「条件とは？」

ウエルキンが不安そうに聞く。

「私を義勇軍へ入隊できるように便宜を図ってもらいたい、私は昔はここに住んでいたが今は連邦の人間でね、連邦人がガリアの軍に入るのは難しいでしょう、手を貸していただきたい」

もちろん嘘である。

「それなら・・・でもなぜ？」

ウエルキンは怪しそうにこちらをみつめる

「ブルールは私の故郷なのだよ、思い出の風車も破壊されてしまつて、私は決心したんだ」

「そうでしたか、わかりました、できる限りのことはします」

「交渉成立ですね」

「ありがとうございますムスカさん」

「いえ、困った時はお互い様です」

ウエルキン ムスカ イサラはウエルキンの自宅へ向かった。

途中家に押し入れられ略奪を受けていた家もあった、悔しいが見つかるわけにはいかないので無視して行った。

30分ほどだろうか、茂みの中を歩き、他人の庭を通り、帝国兵が過ぎるまで隠れて、見つからないように歩いたのは。

「あの家です、僕の家は」

周りの家と比べて大きく、敷地も広がった。

真っ先に略奪を受けていそうだが……

第二話 提案（後書き）

やはり難しい、ムスカらしさが全然でていない。

ラピュタ見直してきます・・・

第三話 戦車

ウエルキンの家にたどり着いた一行は家の玄関へ近づいていく。

玄関まで近づくと中から銃声が聞こえてきた。

窓から覗くと妊婦が三人の帝国兵に銃を突きつけられていた。

「なんだこのババア、ガキを孕んでやがんのか」

一人の帝国兵が倒れている妊婦に向かって言った。

「面倒くせえ、まとめてぶっ殺してやる」

もう一人の男が妊婦に銃を撃とうとした時。

「マーサさん！」

ウエルキンが飛び出していった。

「な、なんだてめえ！」

ドカッ！

ウエルキンがいつの間にか持っていた棒で一人の帝国兵を殴り倒した。

「野郎！」

二人の兵士がウエルキンに向かって銃を構える。

バン バン

二発の銃声が家の中に響く。

倒れたのは帝国兵二人だ。

ウエルキンが見ると、ムスカとイサラが帝国兵に向かって銃を撃っていた。

「だ・・・ダルクスの雌豚があっ・・・」

イサラが撃った帝国兵がイサラの巻いた布を見ながら死んでいた。ムスカのほうは頭に銃弾を受け即死だった。

「ウエルキンさん、焦りは禁物ですよ」

ムスカがりボルバーの弾丸を装填しながら言った。

「す、すみません」

ウエルキンがムスカと話している間にイサラは妊婦のほうに行っていた。

「マーサさん！」

返事はなかった、息が荒い。

「いけない、陣痛が始まって、動かすのは危険です」

イサラはそう言うが。

「といつても、ここで寝かせておくわけにはいかないよ、かなりの数の帝国兵が街に侵入している、風車塔広場が制圧されるのは時間の問題だ」

「兄さん、ムスカさん、庭の納屋にいきましよう」

「「納屋に？」」

「父さんたちが残してくれたものが私たちを助けってくれると思います」

所変わって納屋

「ほう、戦車ですか、ですがなぜ一個人が戦車を保有しているのです？」

ムスカが関心したようにいう。

「僕の父さん、ベルゲン・ギンターは英雄と呼ばれたガリア公国の將軍でした、この戦車は10年前にイサラのお父さんの技師ティマーが父さんのために作った戦車、エーデルワイス号です
父さんはこれに乗り、戦っていたそうです。」

ウエルキンがムスカに説明する。

「そうですね、しかし10年前の代物を動かせるのですかね」

「戦車整備は私がやっています、それとエンジンに新型のタービンを搭載して、出力重量比を向上しています。」

兵装は88mm砲と12.7mm車載機銃です。

88mm砲は徹甲弾と榴弾砲に対応しています。

しかも自動装てん機能を搭載し、装填手が不要となっていて連射も可能です。

現代の戦車と比べても、水準以上の火力と機動力を発揮できます」

「ふむ、脱出手段は何かありましたね、あとはマーサさん、ですか・・・」

「それなんです、戦車に乗せたいと思います、安全な場所はそこぐらいしかありませんし」

ムスカは戦車に妊婦を乗せるという案に苦笑したがそれ以外に方法

はなかった。

そして、家からマーサさんを連れてきたウェルキンは四人は戦車に乗り込む。

戦車の中は意外に広く、あと一人は入れるサイズだった。

ウェルキンが頭にインカムをつけ、車外に身を乗り出す。

「イサラ、発進準備はできているか」

「エンジン始動、エーデルワイス号発進準備整いました」

「アリシア達が住民を逃がすために交戦中かもしれない、風車塔広場を抜けてアリシアと合流してから街を脱出しよう、エーデルワイス号発進！」

ウェルキン達が戦車を動かして二分後、風車塔広場まで来た、帝国兵との遭遇は無かった。

しかし近くから砲撃音が聞こえる、戦車がいるようだ。

「アリシア達が戦車に遭遇したらまずい、僕たちで戦車に攻撃しましょう」

ウェルキンがそう提案した。

「それがいいでしょう」

ムスカも賛成だ。

「わかりました、対戦車戦闘準備、徹甲弾装填完了！」
イサラが本当の軍人のように言った。

「よし、エーデルワイス号で敵戦車を攻撃するぞ！」

エーデルワイス号は風車塔広場を抜け、市外の門直前まで来ていた。さすがに帝国兵が居たが車載機銃で迎撃していく。

対戦車兵も居たがかなりのスピードで移動するエーデルワイス号に直撃する弾はなかった。

「素晴らしい、時速55kmはでているじゃないですか」
ムスカは驚いた。

この速度は巨体のエーデルワイス号に不釣り合いな速さだった。

戦車の中で一番速いガリア公国の主力戦車の最高時速は50kmだ。

エーデルワイス号は巨体に似合わず60kmは出せる設計になっている。

それに加えこの戦車には傾斜装甲が搭載されているのでかなり頑丈だ。

この時ムスカはクラッペから戦車に跳ね飛ばされる帝国兵を見て。

「はははっ、見る、人がごみのようだ」

とつぶやいたとされる。

敵戦車の砲撃音が近くなっていく。

初の戦車戦を乗り切れるのか。

第四話 決意

ウェルキンらが戦車で向かっていた頃。

ブルール市 正門

「みんな！街の人たちが逃げるまでこの門を死守するのよ」

現在住人を市外へ脱出させるためブルール自警団25名が正門に陣を構えている。

「アリシア隊長、敵の数が多すぎます！」

帝国兵は散開しているため少数だが、倒しても湧いてくる状態だ。

それに加え

ブルール自警団の装備はガリアン-1という5連射のライフルで。戦車対策はランカー対戦車槍が一丁あるだけだ。いずれも自警団モデルで性能は低い。

対する帝国兵の装備はZM-Kar1ライフルやZM-MP1マシンガンという最新鋭の装備だ。

物量で攻撃してくるので陥落は時間の問題だった。

「あと5分持ちこたえて！5分たったら退却できるわ」

アリシアはそう言いながら5分持ちこたえられるか考えていた。

このままじゃ3分持たないだろう。

バン バン バン バン カラーン

こちらのリロードの内に帝国兵は着実に間を詰めてくる。

もう駄目か、とおもったアリシアは手りゅう弾を投げ退避命令を出そうとした。

その時

キュラキュラキュラ

「！この音は」

陣の右の道から音がする。

アリシアは避難所でウェルキンが戦車を持っていることを聞いていた。

取りに行くからついてきてと頼まれたが自警団の仕事があったのでちょうど居たムスカに押しつけていたことを思い出した。

（助かった・・・）

しかしそううまくいかないものである。

右から現れたのは帝国軍戦車だった。

「そんな……」

アリシアは悲観した。

「て……帝国軍の戦車だー！」

自警団は慌てふためくが

「俺がぶっ壊してやる！」

自警団の一人の男が対戦者槍を構え帝国戦車に撃った。

ヒューーーン　バキン

対戦車槍は帝国戦車のキャタピラに当たり走行機能は失ったが。

ウィーーーン……

戦車の砲塔が動き出し、こちらを向いた。

「うわあああ！」

ドン！

ザブツ・

初弾は土囊にあたったが信管が作動しなかったようで爆発しなかったが。

次の砲撃でやられるだろう。

自警団はすでに壊走していた。

みんな自分の命が惜しいのだ。

帝国戦車が砲撃しようとした時。

もう一台の戦車が到着した。

「撃てー！」

砲弾は直撃し、帝国戦車は爆発、炎上した。

「わああ！戦車だ！ガリアの戦車が来たぞオ！」

帝国兵が対戦車銃を構えるが。

ターン ターン ターン

銃が突如爆発し、持っていた兵は爆発を受け死亡した。

ムスカがクラッペを空けてそこから狙撃したのだ。

バババババババ ドーン

車載機銃と砲撃で帝国兵は蹂躪されている。

「た……助かったあ……」

みんな、退却よ！」

アリシアは自警団を連れ、集合地点まで退却していった。

エーデルワイス号もその後ろをついて行った。

「助かったわ、ウエルキン達が来なかったら・・・」

集合地点についたアリシア達はウエルキン達の所にきていた。

「間に合ってよかったよ、でも、ブルールの街は・・・」

街はいたるところが炎上していて親子風車は倒壊。

見る影も無くなっていた。

「帝国め、許さない！」

「僕は戦争は嫌いだけど、僕たちみたいに苦しんでいる人を助けたい、ブルールに戻ってきたい、ムスカさん 僕も義勇軍に入ることします」

「あたしも入るわ！ブルールを取り返しましょう」

「それはいい、戦力が多いほうがいいですからね」

ムスカ、ウェルキン、イサラ、アリシアは義勇軍に入ることを決めた。

第四話 決意（後書き）

第五話と誤表記していました。
すみません

第五話 入隊

ムスカは書類を偽造して義勇軍に入隊。

ムスカは軍曹としてアリシア軍曹と共に義勇軍第七小隊隊長のウェルキン少尉の補佐となった。

「全体整列！」

ザッ

左からアリシア ウェルキン ムスカ という並び方で隊員と向き合う。

「ムスカ・ウルラピユタ軍曹です」

「アリシア・メルキオット軍曹です。」

これより第七小隊隊長からの着任のあいさつがあります、それでは、ウェルキン・ギウンター少尉」

アリシアが間違えて顔を赤らめる。

「いいよ、無理しなくて。」

今日から一緒に戦うことになったウェルキン・ギウンターですよろしく」

ザッ

隊員が敬礼をする

「みんな、堅苦しいのはなしにしよう」

「や・・やすめ！」

ザッ

「けっ、大学でのひよっこが、実戦経験も無いくせにえらそうに隊長様気取りかよ」

「ああ、気に入らないねえ」

ラルゴ・ポッテル軍曹

ブリジット・シュターク伍長

この二人は隊長の事をあまりよく思っていないらしい、これは隊員との不仲を助長するかもしれない。
ムスカはどうするか考えていた。

「まず、みんなに言っておきたいことがある。

戦闘に置いて一番大切なことは何か、君たちにはわかるか？」
するとポッテル軍曹が自信ありげに。

「へっ、そんなの決まってる。経験だよ、経験」

「うん、確かに経験は大切だ、だが一番大切なことじゃない」
ウェルキンの答えに対してポッテル軍曹の表情が変わった。

「一番大切なのは君たちの命だ」

この答えに小隊員はざわめく。

「何を甘ったれたことを・・・」

ボツテル軍曹は呆れた顔でウェルキンを見ていた。

「戦いを続けて行けば、いろいろなことがあるだろう、つらいことや楽しいこと、うれしいことや悲しいこと、しかし、そのどれも生きていなければ味わうことはできない、死ねば同じだからだ。

どんな状況に陥ろうとも、生きてさえいれば希望がある、死ぬな、僕がこの小隊を率いていくにあたり、君たちの命を守るために全力で努力すると誓う、だから君たちも生き残るために全力で努力してほしい、以上だ」

ウェルキンら3人が去った後、ボツテル軍曹やシュターク伍長、数人が集まっていた。

「どんな状況に陥ろうとも、生きてさえいれば希望はある、だってよ、まったくご立派ご立派

さすが大学出のボンボンの言うことは違うわな」

「ホントだよ、あんなちゃんけな演説でアタイらを飼いならそうってんだからね」

「しかし、飛んだ貧乏くじだな、よりによってあんなのが隊長だとはな」

「はぁ・・・でもこの小隊にはもっと洒落にならない問題があるよ」

シユターク伍長は整備を終えたイサラを見て言った。

「あのケープの娘か」

「ああ、間違いなくダルクス人だ」

ウエルキンはその後の小隊長会議でヴァーゼル橋の奪還作戦を聞かされた。

そして翌日義勇軍はヴァーゼル橋に進軍した。

張り詰めているアリシアにウエルキンが声をかけた。

「アリシア、今からそんなに力んでいたらいざという時息切れしちゃうんじゃないの？」

「だったら、どこかの隊長みたいにヘラヘラしてたらいいの!？」

ジト目でウエルキンを見るアリシア。

「手厳しいな、でも、正規軍が先に出撃してるし、もうヴァーゼル市はこっちのものになってるかもよ？」

ウエルキンの予想は外れた。

「見えてきたぞ、ヴァーゼル市だ！」

先行していた第一小隊が声をあげた。

双眼鏡でムス力は様子を見た。

ヴァーゼル市は黒煙が上がり、こちらの川岸には戦車の残骸があり、向こう岸には帝国戦車が巡回していた。

「どうやら、そううまくいかなかったみたいだね」

ついたそうそう、戦況はこう着状態に陥っていた。

正規軍が無理やり1本しかない橋を渡ろうとして全滅したらしい。

「もう我慢できないね、今すぐアタイ達の前から消えな」
シユターク伍長の叫び声が聞こえてきた。

「どうしてですか」

イサラが問うが。

「なんだい、わざわざ言わなきゃ分からないのかい！」

「ちょっと、何やってるの！」

アリシア ウェルキン ムスカが来た。

「ちょうどよかった、隊長さんよ この際はつきりさせようじゃないか」

「どういうことだい？」

「決まっているだろ、ダルクス人と一緒に戦えないってことさ」

「ちよつとあなた！」

アリシアが怒るが。

「俺も同感だ」

ボツテル軍曹が割り込んできた。

「ダルクス人は昔から厄介事を呼び込むっていうしな」

「おいみんな「無駄だよ、実戦経験の無い坊主の指示になんぞ、誰も従わねえよ」

いつの間にか集まっていた小隊員は隊長にあまりいい顔をしていなかった。

「目ざわりなんだよ、これ見よがしにダルクスの布なんて巻きやがって」

シユターク伍長についてイサラが反論した。

「確かに私はダルクス人です、でも、私もあなたたちと同じ人間です、それに、ダルクスの災厄は科学的根拠のない風説にすぎません」

「なんだい、私が言いがかりをつけてるとでも？」

そろそろ止めるか、とムスカが銃を取ろうとしたが。

今まで黙っていたウエルキンが話し出した。

「よし、だったら懸けをしよう」

「「「「はあああ!？」「「「「

辺り一帯に小隊員の声がこだました。

第六話 奇襲

「「「はあ????」」」

突如ウエルキンが提案した懸けにみんな困惑していた。

「君たちは僕に従いたくない、僕は君たちを従わせたい、だったら懸けをするのが一番早い」

「ふざけんな、こんなときにコインでも投げようつてのかよ」
このふざけた提案にボッテル軍曹が怒った。

「どうやら一番の問題は僕に隊長の素質があるかのようだ、だから二日だ、二日で片をつけよう」

「ウエルキン……?」

「隊長?」

「約束するよ、48時間以内に僕は第七小隊だけであの橋を奪還してみせる」

「正気かよ……お前……」

「もううまくいかなかったら僕は隊長を辞任する、うまくいったらみんな僕の指示に従う、それでいいね」

「その言葉、二言は無いだろっね」

「後悔するなよ」

シュターク伍長とボツテル軍曹に念を押され。
「じゃ、交渉成立だね」

あの後ウエルキン、ムスカ、アリシアは河原で作戦を立てていた。

「つたく、何考えてるの？」

「本当ですよ、まったく」

「何って言われてもなあ・・・」

「あ、わたりつばめだ」

川を飛んでいるつばめをみたウエルキンが突然いいだした。

能天気な隊長だとムスカは思った。
だが何かがある、そう考えた。

「正規軍にもできなかったことを、私たちだけで、しかもたった二

日であの橋を取り戻すなんて無理に決まってるわ・・・」

「あれっもしかして、僕を心配してくれているのかい？」

「ばっ・・・そんなわけないでしょ！」

アリシアは顔を赤らめて反論している。

「まっ、なるようになるよ」

「どうやったらそんな能天気になれるわけ・・・」

「天気と言えばさ、明日の朝はいい天気になりそうだよ、僕らにとつてね。」

二日って言ったけど、もっと早く済みそうだ」

「はあ？」

「アリシア、ムスカ、みんなに伝えてくれ、明朝0500時に作戦を開始する」

「了解です」

ムスカはそう答えたがアリシアは茫然としていた。

この時アリシアは思っていた。

（だめ・・・全然わかんない・・・何考えてるのこの男・・・）

0500時

「ねえウエル……隊長」

「いいよ、ウエルキンで」

「じゃあウエルキン、この霧がでる事わかってたの？」

「霧っていうのはさ、水蒸気を含んだ空気が冷やされることによって発生するんだ、それに、わたりつばめも飛んでいたしね。さてと、これから忙しくなるぞ！」

小隊員を招集したウエルキンらは川岸にあつまっていた。

「我々第七小隊は東岸にある敵防衛拠点に奇襲をかける」

「何言ってるんだ！いくら霧が出てたって、この数であの橋を渡りきれぬわけ……」

「橋は使わない、わたるのは、この川だ」

ウエルキンはシュターク伍長の意見を割り話す。

「戦車なしで突っ込めってか！俺たちに死ねと言ってるようなも……」

「安心してくれ、戦車も使うよ」

ウエルキンはまた意見を割り話す。

「ハンツ、空でも飛ばすのかい」

「ああ近い、でも空じゃなくて水の中だ、僕らはこのエーデルワイ
ス号で川を渡り切る」

突拍子の無い提案に呆れかえって。

「ふざけてんのか！戦車ってのはな、水ん中じゃなくて、地面を走
るもんだ」

「正気の沙汰だとは思えないね、戦車で川を渡るなんてね」

「だからこそ！だからこそやる意味があるんだ」
その言葉に皆は黙った。

「作戦内容を伝える、これよりエーデルワイス号は渡河を開始、歩
兵部隊はその間船上で待機」

味方の攻撃を確認後接岸し、一気に敵拠点を制圧します」

ムスカが説明を試みてみな持ち場についた。

「さあみんな、僕たち第七小隊の初仕事だ、張り切っていこう！」

「兄さん、ムスカさん、ごめんなさい、私のせいで・・・」
イサラがシユターク伍長達との提案の件で謝っていた。

「いいんだよ、逆に助かった、この小隊をまとめるには避けて通れ

ない事だろうからね」

「そうですよ、それにあそこまで言われて黙ってたら体に悪いですからね」

「それにイサラが居なかったらこの作戦も成立しなかった」

「防水処理がどこまで持ってくれるかは、やってみなければ分かりませんけど」

「すまない、こんな無茶につき合わせて」

「いいえ、信じてます、兄さんの事も、エーデルワイス号の事も」

（まさか渡河とは・・ウェルキン隊長、あなたはとんでもない才能を持っているかもしれませんよ）

「準備はいいかい」

「はい」

「じゃあ、作戦開始だ！」

エーデルワイス号が川に向かって動き出す。

そしてアリシアが小隊員に呼び掛ける。

「さあ、私たちも行動開始よ」

第七話 隊長

渡河を開始して1分、車内に浸水が発生した。

「イサラ、エンジン最大出力、エンジンが止まったらこの作戦は失敗する！」

「対岸まであと100です！」

「持ってくれよ……」

90……80……70……60……

ザッバーン！

川岸に上がったエーデルワイス号。

「渡河成功、パージします！」

渡河仕様の装備をパージする。

「よし、作戦開始だ！」

土手にいる戦車を砲撃する。

ウィーン ドン！

「敵襲です！」 「なんだと？ 敵の数は！？」 「不明です！」
帝国側は混乱に陥っていた。

「よし、上陸開始！」

ボートで待機していた小隊員が対岸に上陸する。

この時小隊は敵の駐屯地を挟むように展開していた。

「ガリア軍の奇襲だ！ 迎撃しろお！」

あわてて迎撃にきた敵兵士を狙い撃つ。

ターン ターン ターン

ムスカも戦車を降りて白兵戦闘をしていた。

左右からの攻撃。

エーデルワイス号は確実に戦車を砲撃し、無力化する。

ラルゴらも奮戦していた。

この時帝国軍の指揮官は取り乱していた。

「くそっ、まさか奇襲とは！」

すると隊員の一人が寄ってきた。

「隊長……完全に囲まれました……」

「くそっ……これまでか」

この奇襲が第七小隊の独断とは夢にも思っていなかった。
帝国軍は降伏し、ヴァーゼル橋はガリア公国が取り戻した。

「諸君、よくやってくれた」
バーロット大尉が激励の言葉を送っている。

「まさか、成功するなんてな・・・」

「ここまですまくいくとはね・・・正直驚いたよ」

ポッテル軍曹とシユターク伍長がそうつぶやいていた。

「あなたたち、約束通りウエルキンに従ってもらうわよ！」
アリシアがドヤ顔で言っている。

「ちっ、しょうがねえな、約束は約束だしな」

「隊長の事は認めてやってもいいけど、アタイ達はダルクス人まで認める気はないよ」

そう言うツカツカと行ってしまった。

「ちょっと！もう・・・」

「アリシアさん、いいんです、慣れてますから」

イサラが諦めた表情で言っていた。

「でも、ダルクス人とみんながわかりあえる日が来ることを・・・
信じています」

「それにしてもウエルキン隊長、大手柄ですね」
ムス力は橋を通るガリア軍を見ながら言っていた。

「手柄か・・・第七小隊のみんなのおかげだよ。僕だけじゃ成功できなかった」

その時割り込んでくる人物が居た

「ハーイ、お取り込み中すみません、GBS記者のエレットです。

ギウンター隊長、初めての作戦で目の覚めるような戦果でしたね！」

「はい。今回は隊員たちの働きによってヴァーゼル橋を奪還することができました」

とニコヤカに答える。

「この戦いを通じて、ギウンター隊長なりに何か感じたことはありますか？」

「感じたこと・・・そうですね、橋というのは、人々の生活に無くてはならないものです。

僕も第七小隊のなかで。みんなの心と心をつなぐ橋のような存在になりたいと・・・そう思います」

「ありがとうございます、それではムスカさん、ギウンター隊長について教えてください」

今度はこっちに来た。

「そうですね、人を引き寄せる何かをもっています、頭もいいですね」

「ありがとうございます、それでは！」

記者は去って行った。

side - ウェルキン -

次の日バールロット大尉が小隊長を招集した。

「先日、第七小隊の働きにより、我々はヴァーゼル橋の奪還に成功した。

わが軍が勢力境界線を押し戻したことで帝国は中部ガリアに兵を集めざるを得ないだろう。」

「それでは、義勇軍は中部ガリアに進軍するのですか？」僕の親友、ファルディオが言った。

「いや、中部ガリアには正規軍が向かう、我々義勇軍中隊は南部ガリアに進軍する。

次の進軍地は、ここクローデンの森だ。この森には帝国軍が中部侵攻の為に建設した補給基地がある

今回の義勇軍中隊の任務は補給基地の制圧だ、各小隊は命令があるまで待機、諸君らの活躍に期待しています、以上！」

隊長らが解散したあと、僕とファルディオは話をしていた。

「森林戦は・・・いやだな」

「どうしてだい？」

「樹林は方向感覚を鈍らせるし、悪路は進軍の妨げになる。これまでになく厳しい戦いになるだろう」

「でもあの森には珍しい動植物がいっぱいなんだよ」

「あいかわらずだなあお前は」

「でも、そういう植物がヒントになるかもしれないよ？」

「なるほどな、俺もヒントを探しながらすすんでみるか・・・」

第八話 羽豚

しばらく森を進んでいると第七小隊は停止していた。

隊長がけもの道を発見したようだ。

ついでに豚を発見したそうだ。

ん？・・・・・・・・・・豚に羽が生えている。

ムスカはこの豚を見たとき呆れかえった。

この豚に羽が生えている必要があるのか、と。

この時ムスカはこの豚が第七小隊の隊員となることを夢にも思っていないかった。

今回の第七小隊の任務は、敵補給基地の制圧だ。
ここら辺の林道はすべて帝国軍が抑えている。
エーデルワイス号の攻撃で帝国軍をかく乱し、我々は獣道からの少数突破で敵陣に奇襲をかける。

「帝国兵を発見しても見つからない限り発砲は控えるように」
部隊長ムスカが隊員に言う。

獣道はムスカが先行し。

アリシアは中間にいる。

現在獣道を通って敵の敷地内に侵入している。
ウェルキン隊長の予想通り、補給基地周辺までつながっている。

部隊はウエルキンとイサラを抜いた全員、作戦開始まで見つかるわけにはいかない。

草を抜けて基地の防護フェンスまで来た。

慣れないことの連続に小隊員は疲れていた。

「ふむ、時間まで待機、各自警戒を怠るな」

そして……

一発の砲声が聞こえた。
作戦開始だ。

まず櫓の歩哨を狙い撃つ。

無力化……いや、まだ動いている。

すると横からアリシアが飛び出していった。

案の定敵歩哨に足を撃たれた。

アリシアは足を撃たれながらも回転して敵の作った土壌に隠れた。

敵歩哨は小隊員から狙い撃ちされ死亡した。

「功を急ぐと、元も子も無くしますよ。メルキオット軍曹。
その怪我では動けない、エヴァンス上等兵、軍曹を頼む」

ムスカがアリシアに休むよう言った。

「ムスカ隊長、まだいけるわ！私は昔から怪我のなおりが早いの、だから」

銃弾は貫通して残っていないが、状態はあまり良くなかった。

「君も女なら、聞き分けたまえ・・・ん？」

ムスカはデジャヴを感じたのではない、

アリシアの足のおかしいのだ。

「おかしい、もう出血量が減っている。これほどの怪我で・・・」
アリシアの傷は圧迫して止血しなければならぬほどの傷なのに、
何もしていないのに出血量が減ってきている。

「ね？言ったでしょ。傷の治りが早いって」

そう言っただけで立ち上がるかと思うが傷が開いて痛いのか、立てなかった。

まだ出血は完璧に止まっていなかった。

「その様子では無理ですよ、足手まといにしかありません、おとなしくしてください」

そう言っただけでムスカは前線へ戻って行った。

結果を言うと、帝国軍は撤退した。

しかしガリア軍が帝国に打撃を与えたかと言うと、そうではない。

敵の指揮官はガリア軍が来る前に補給基地から物資を移動させていたらしい。

おかげで基地に残っていたのは少数の兵。

肝心の補給線を潰すという作戦は失敗に終わった。

第九話 砂漠

我が第七小隊は現在バリアス砂漠に来ている。

この砂漠には大昔に都市があつたらしいのだが、ダルクス人がラグナイトを使い、邪法とも呼ばれる力を使い、都市を壊滅させたと思われる。

この事件のせいでダルクス人が迫害されているようだ。

その災厄の痕跡が砂漠にいまだにある、巨大な岩を貫く穴だ、岩の向こう側が見える。
その痕跡はいたるところに見える。

この砂漠に来てからか、シユターク伍長の機嫌が悪くなっている。

第七小隊はこの付近に帝国軍の部隊を発見したとの報告を確かめに派遣されていた。

小隊は帝国軍を発見するため小高い丘に駐留していた。

「しつかしすげえところだな、ここは人が住める環境じゃねえ」
ラルゴ・ボッテル軍曹は退屈そうに砂漠を眺めている

「大昔は大都市があつたらしいけど、今じゃ不毛の砂漠になつてるんだ」
ウェルキン隊長が説明した。

「この砂漠はダルクス人が焼き払ってできたっていうじゃないか」

「どうやったらこんな広い大地を焼けるっていうんだよ・・・」

この言葉を聞いてムスカは思った。

ラピユタの雷を使えばできるかもしれない、もしかしたらラピユタがこの世界に・・・

しかしラピユタの雷はこのような小さな穴など空けないはず。
この考えはすぐにやめた。

「包囲040、敵戦車発見！距離800、付近を警戒している模様」
アリシアが叫んだ。

「お待ちかねの敵さんの登場か」

「よし、第七小隊は戦闘態勢に移行、帝国軍を攻撃する！」

エーデルワイス号を中心に、部隊を展開し、攻撃にあたる。

砂漠は遮蔽物が少ないから狙撃部隊を編成して援護させる。

キヤスリンとマリーナとツエザリが選ばれた。

「了解だ」「よろしくね、二人とも」「慣れ合うつもりは無い」

敵の構成は戦車五両に歩兵60人と多かった。

対する第七小隊の人数は戦車一両に23名

戦力差は多い、どう挽回するか・・・

第九話 砂漠（後書き）

今回は文章が少ないですが次回は元に戻します。

次回から20時を目安に投稿したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359p/>

ムスカ大佐達がガリア義勇軍で活躍するそうです

2011年1月11日21時59分発行